



改めて言った。

「魔法は、解かなくていい」

「本当にいいんですか？」

マリーは目を丸くする。

僕は席を立ち、彼女の隣に座った。

「魔法を持つ者は長い時を生きる。それは魔法をかけられた僕も同じだ」

「はい」

「君と同じ時間を生きる。それでいいと思ったんだ」

まっすぐにマリーを見つめる。

彼女も僕を見つめ返し、困ったように眉を寄せる。

「私もスマレといられるならうれしいです」

「うん」

「一緒にいたいです。スマレのご飯も食べたいし、絵も見たいです」

「うん」

「でも私は魔女ですよ、人々からおそれられる存在です」



「知ってるよ。僕も似たようなものだ」

「私はスマレの魔法をいつでも解くことができます」

「少なくとも今の僕はそれを望んでない」

マリーは視線を下げ、言った。





「たとえばこれから、スミレとともに数十年過ごしたとします」

「うん」

「そのときに『やっぱり魔法を解いてほしい』と言われても、叶えてあげられないかもしれないですよ」

「どうして？」

「だって、独りで生きていくのは寂しいですから」

「……そうだね。だから、一緒にいるって約束させて」

「いいんですか？」

「うん、いいよ」

僕が小指を差し出すと、マリーもゆっくり手を持ち上げる。
指切りをした。

小さな子たちがするみたいに。

それから、僕たちは旅に出るために部屋の物をまとめた。

「血の跡を追った日の夜が懐かしいです」

「何があるかもわからないのに、よく扉を開けようとしたね」

「自分以外誰も頼れる人なんていませんでしたから。でも今は……これからは、スミレがいます」

「そうだね。行こうか、魔女様」

「からかわないでください」

僕たちは笑い合う。





こうして、長い長い旅がはじまろうとしていた。



魔女マリーの隣には、一人の画家がいる。
その画家は何年、何十年経っても姿がほとんど変わらず、
魔女の使い魔じゃないかという噂が流れていた。

「もしスマレが本当に使い魔だったら、使い魔を画家にする理由ってなんでしょ」

「自分の絵を美しく描いてもらうためとか？ 絵は後世まで残るし」

「私はそんな、国の王様みたいなことはしませんよ」

「わかってるよ。でも、街中で絵を描いているときによく噂を聞くよ。マリーは良い魔女だって」

「それは、授かった魔法のおかげです」

「よかったね。人を傷つけたりする魔法じゃなくて」

「……それ、冗談ですよ」

「ううん、本当にそう思ってる。マリーにそういう魔法は似合わない」

彼は目じりを下げて笑う。

「でも、良い魔女でいられるのはスマレのおかげでもあるんですよ」

「どうして？」





「スマレの過去を知っているから絶対に道を間違えたくないって、そう思えるんです」

「そっか。役に立ててなによりだよ」

「それだけじゃないですよ。旅の中でいろんなご飯を食べましたが、スマレのご飯が一番です！」

力強くそう告げると、スマレは珍しく吹き出した。

「な、なんですか！」

「いや。今日はなにを作ろうか」

「うーん、ハンバーグがいいです」

「魔女マリーはいつまで経っても小さい子みたいなものが好きだね」

「外見は変わらなくても中身は成長してますよ」

「へえ」

「スマレは少し、いじわるになりましたね」

「そうかな」

楽しそうに歩くスマレの隣。

何年、何十年と変わらない、私の居場所。



不意に足を止めた。

先に行くスマレの背に、声をかける。

「スマレ。もう十分生きたと思ったら、いつでも言ってくださいね」

「え？」





「約束をしたからといって、ずっと守り続ける必要なんてないんです。スマレが本当にもういいと思うのなら私は…
…「マリー」

私の言葉を遮るように、名前を呼ばれる。

「僕はまだまだ絵を描きたい。見たことない景色を見て、それを額縁に収めたい」

「……はい」

「君に料理を振舞って、もっと笑顔を見ていたい」

「……うれしいです」

「それに魔女マリーは寂しがりだから」

「そっ！ そう、ですね」

「約束、守らせてよ」

私の目の前に戻ってきたスマレは、しゃがみ、目線を合わせた。

「不老の僕を化け物だという人もいる。でも、君が僕を人として見てくれるなら、それでいいんだ」

「当然です。出会ったときから、私はずっとそう思っていますよ」

「ありがとう、マリー」

「それは私の言葉です。スマレがいてくれるから、私はこの長い長い人生を続けられます」

「そっか」

「……これからも、傍にいてくださいね」





「うん、もちろん」

立ち上がったスマレは私の隣に並んだ。
そうして、二人で歩きだす。
これからも魔女と画家の旅は続いていく。

ED5【魔女マリーと不老の絵描き】

